

野生動物の移・食・住を守る

— 北海道のフィールドから —

柳川 久

広大な面積を持つ北海道でも人間の生活・生産の場と野生動物の生息域が接する、あるいは重なることで人間と動物の間にさまざまな軋轢が生じている。その結果、動物と人間のどちらかが「被害者」になり、どちらかが「加害者」となる、あるいは双方ともが「被害者であり加害者でもある」関係が生じている。そうならないためにも、多くのケースで野生動物の生息地の保全が必要であった。その場合にいつも念頭においているのが野生動物の「移・食・住」の確保である。「食」と「住」が大切なのは人間も同じ、「衣」だけは自前でまかなえている野生動物にとって重要なのは安全な移動経路の「移」である。いくつかの実際の保全例については、先に出版された拙著『北の大地に輝く命——野生動物とともに』（東京大学出版会、二〇二四年）で紹介させていただいた。今回はこの紙面をお借りして、ここでは紹介しきれなかった動物であるナキウサギと、本の中でも触れているが、その後の進展があったヒグマの事例に

ついでご紹介したいと思う。

ナキウサギにふとんかご

ナキウサギ（写真1）は日本では北海道のみに分布する小動物である。「氷河期の生き残り」と呼ばれ、北海道でも年間を通じて冷涼な気候が保たれる標高の高い「がれ場」と呼ばれる岩塊地がおもな分布域である。そのため分布も大雪山系、日高山脈、天塩山地、芦別・夕張山塊、北見山地の限られた地域であり、環境省のレッドデータブックでは準絶滅危種に指定されている。

北海道にナキウサギが生息することが学会などに知られるようになったのは比較的近年で、昭和の時代になってからである。道東の北見地方でカラマツの苗木が噛み切られ、運び去られるという被害があった。エゾヤチネズミやユキウサギの被害とは異なる被害に営林関係者はその謎の害獣を「特殊野鼠」と

呼んで、その正体を調べるために罾を仕掛けた。罾で捕獲された動物は、エゾヤチネズミをひとまわり大きくしたようなずんぐりむっくりの動物だった。

動物学者の岸田久吉が一九三〇年にこの動物を「エゾハツカウサギ」として紹介して、北海道に初めてナキウサギが生息することが広く知られることになるのだが、それ以前にも北海道に入植した人たちの間ではこの動物の存在が知られていた。十勝地方の然別湖^{しかべつこ}周辺の開拓民はこの動物のことを「ゴンボネズミ」と呼んでいた。まあ、ナキウサギを知る専門家ならいざ知らず、ユキウサギと違って耳も短い、手足も短い、そしてよく鳴くこの動物をウサギの仲間と思えというほうが無理であろう。

さて、そのナキウサギ、おもな生息域が比較的標高の高い山地域であり、人間の生活・生産圏でないために、平地などに住む他の動物と比べると人間との軋轢は少ない動物である。その

ことは彼らにとって幸せなことではあったのだが、一方でそのために生態に関する基礎的な研究はあるが、その保護や保全に関わる応用的研究はほぼ見当たらない。

ところが、近年になってナキウサギの生息が低標高の場所でも知られるようになり、その知られた理由が林道の開削や砂防ダムの工事などの開発のためのアセスメント調査によるものであった。そこで「ナキウサギの保全をどうしましょう？」という相談がくるのだが、なにせ海外でも過去に保全・保護の事例がない動物である。オリジナルの対策を考えるしかなく、まずはその方針を立てるため、その場所をナキウサギがどう利用しているのかを調べてみた。

録音した音声を流し、それに対する反応を見る「プレイバック調査」の結果、低標高の小規模な生息地にはなわばりを持つ定住個体は見られず、おもに移動の際の一時的な滞在地である



写真1 鳴いているナキウサギ

ことがわかった。林道の開削などでその生息地がよりオープンになると、移動時に天敵のキタキツネやクロテンに発見されやすくなり、捕食されるリスクが高まることが予測された。そこで、保全策としてはナキウサギの定住できる「住」の確保ではなく、より安全に使うことのできる「移」の確保とした。また、小規模ではあるが、ところどころに草や葉の貯食があったので「食」も念頭においた。

具体的な保全策としては、林道に沿って断続的に存在する小規模な生息地を「ふとんかご」や人工の石積みを用いて繋ぎ、一連の帯状の移動経路をつくろうという案である。「ふとんか

ご」は、普通は河川の護岸や斜面の補強などに用いられる金属製の籠かごに砕いた岩を詰めたもので、最近では小さな生きものに住み場所を提供するエコスタックなどにも用いられている。これを岩場に住むナキウサギにも応用しようと考えた。

この場合に大切なことは、実際にナキウサギに利用してもらうには、どのくらいの大きさの岩を使い、どのくらいの隙間をつくる必要があるかを知ることである。そこで、実際にナキウサギが生息する岩塊地で岩のサイズ（岩の長径×短径）と岩の隙間の水平深度、垂直深度を計測した。そして、それらの値に見合う岩をふとんかごに詰める、あるいは直接人工的に積み上げて、分断されていた小規模な岩塊地と岩塊地の間を繋いでみた。結果は思惑どおり、ナキウサギが移動の際に利用してくれたように、新たに積まれた人工の岩積みの隙間のいくつかに貯食が見られた。ただ、相変わらず定着しななばりを持つナキウサギは現れていない。

これでその問題は一応の解決を見たのだが、最近になって新たな脅威がナキウサギとその生息地に現れた。手軽によい写真が撮れるデジタルカメラとインスタグラムなどのインターネッ

ト環境の普及によるわかカメラマンの急増である。北海道ではエゾリス、エゾモモンガ、クロテン、シマエナガなどのかわいい系の動物がその被写体として追われることとなり、ナキウサギもその一つで、ある生息地には休日には二〇人を超えるカメラマンが集まっている。現在はそれらの人々がナキウサギの行動に与える影響も調査中で、開発に限らず、時とともにいるんな問題が生じてくるのだなど、考えること多々な今日このごろである。

ヒグマに脚立

苫小牧市植苗地区のノーザンレーシング社有林（以下、植苗社有林）では、「持続可能な森林経営」のための国際的な指標である「モントリオールプロセス」を採用しており、木材生産と生物多様性の保全の両立を目指した森林経営を実施してい

る。この林にはヒグマのコリドー（回廊）が存在することが以前より知られており、森林生態系の頂点であるヒグマによる林内の利用と安全な林業作業の両立が求められていた。

近年、北海道の人間とヒグマの軋轢は深刻な状態で、二〇二四年三月に北海道庁の発表したヒグマの推定生息数は中央値で一萬二七五頭、二〇二三年度の駆除数は過去最多の一四二二頭であったが、生息数が減少している兆しは見られていない。二〇二三年には道北の幌加内町朱鞠内湖で五月に、道南の福島町大千軒岳で一〇月から一月にかけてヒグマの襲撃による死亡事故が発生している。

北海道がまとめた、記録のある一九六二年から二〇二三年一月までのヒグマによる人身事故一五五件のうち、林業関係者と思われる人たちが被害に遭った事故は二二件あり、全体の一四パーセントである。近年では、二〇二一年六月に道東の厚岸町で伐採のための測量作業をしていた林業作業員が、二〇二三年二月には道南の函館市内の山林で剪定作業中の男性作業員がヒグマに襲われ負傷している。

植苗社有林では、安全な林業作業とヒグマなどの多様な野生動物の移動経路確保のため二〇二一、二〇二二年と調査を行ってきた。その結果をもとに社有林内に①ヒグマの移動経路を確保するためのヒグマコリドーゾーン、②生物多様性を涵養するために人工の水場を設置する水場ゾーン、③皆伐、間伐や植林を行う林業作業ゾーン、をかりに設け、二〇二三年はそのそれ

の他はエゾヤマザクラ、ナナカマドなどが合わせて一〇四〇本である。

さて、ここで問題となるのが、この林に高密度で生息するエゾシカからどうやって、被害を受けやすい広葉樹の苗木を守るか、ということである。これは単純には防鹿フェンスで周囲を囲めば防ぐことができる。フェンスの高さは高速道路などのエゾシカ侵入防止フェンスに合わせて地上二・五メートルとする。

ところが、このエリアはヒグマの生息地でもあり、このフェンスがヒグマによって破壊される可能性が十分想定される。そこで鹿用フェンスのヒグマの通り道に接すると想定される場所に、ヒグマだけが出入りできる構造物を設置することを考えた。ヒグマは苗木を食害する可能性は低いので、フェンスを壊されてそこからシカが出入りするようになるよりも、ヒグマの

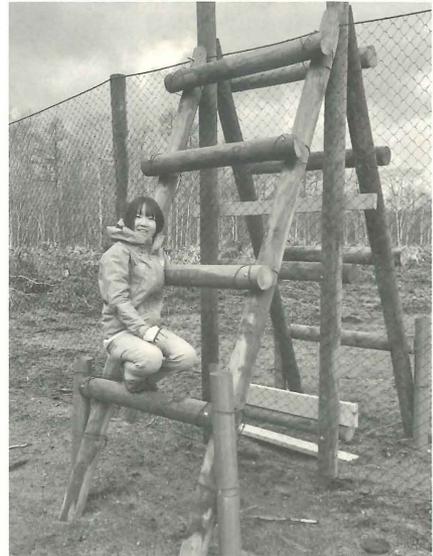


写真2 防鹿フェンスとそれをまたいで設置されたヒグマ用の脚立。乗っかっているのはうちのヒグマ担当の学生

ぞれで調査を行った。このうちコリドーと水場の利用については、ヒグマによる利用が認められたため、『北の大地に輝く命——野生動物とともに』でも紹介させてもらっているが、林業作業ゾーンの取り組みはまだご披露しておらず、その後の進展もあったのでここで紹介させていただきたいと思う。

この林業作業ゾーンでは、基本的にはカラマツの育生・販売を行うが、一部で生物多様性に寄与する試みも実践されている。二〇二三年二月に皆伐された三・五二ヘクタールの部分に生物多様性に配慮して広葉樹が植栽された。植栽本数は七〇四〇本で、ミズナラが四〇〇〇本、シラカンバが二〇〇〇本、そ

出入りのみ自由にする思惑からである。そのため、ヒグマには利用可能で、エゾシカには利用不可能な構造物をみんなで作え、脚立状の構造物を設置することにした。そして、その考えに乗ってくれた周囲の人たちのおかげで、三〇〇キログラムのヒグマが乗っても壊れない頑丈な脚立ができた（写真2）。これも、人間側の都合によるものではあるが、ヒグマの「移」の確保ではある。

この「ヒグマの脚立」にしろ、「ナキウサギのふとんかご」にしろ、ちょっと考えればだれもが思いつきそうで、でも実際にはなかなか思いつかない、あるいは思いついても実現しそうなないことを、一緒に考え、実現化させてくれた仲間たちに感謝しつつ、この文章を終えたいと思う（じつは、ヒグマの脚立はまだできたばかりで、実際の利用は確かめられていない）。

（やながわ・ひさし 野生動物の保全管理）